

『剪燈新話句解』考

——朝鮮本と和刻本——付・伝本目録

邊 恩 田

一 『剪燈新話』と『伽婢子』

近世の怪異小説を代表する浅井了意作『伽婢子』を「洛下松雲所集有十三卷」と紹介し、さらに続いて、

剽窃剪灯新話述怪異之事

とし、『伽婢子』を『剪燈新話』の剽窃だと評したのは、紀州藩の儒医石橋生菴（一六四二—一六九七？）であった。これは生菴の日記『家乗』の寛文八（一六六八）年五月一〇日条に見える記述である。

生菴はこの日、『伽婢子』を借りたのであるが、それは『伽婢子』刊行の寛文六（一六六六）年から二年後のことであった。

一方の『剪燈新話』の本は、すでに寛文四（一六六四）年二月五日に購入していた。したがって生庵は、両作品を読み、対比することができたわけである。またそれが可能であったのは、彼が文学作

品を対比する視点と関心を持ち備えていたからに他ならないだろう。では、生菴が手に入れた『剪燈新話』は、どのような本であったのだろうか。それは『剪燈新話句解』という、日本で摺られた和刻本であったと思われる。

なぜなら、図1のように、江戸期の書籍目録、寛文十年刊、寛文十一年刊、そして延宝三年刊書籍目録には、「剪燈新話」の外題で『剪燈新話句解』が売られていたことが、確認できるからである。

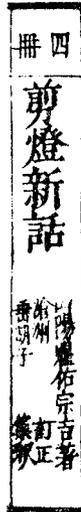
二 『剪燈新話』と日本における享受

いうまでもなく『剪燈新話』は、中国明代の初めに、瞿佑が創作した志怪・伝記小説の傑作である。日本にも伝わり、前掲の『伽婢子』という翻案怪異小説の誕生を誘引したのであるが、以降の江戸文学にもさまざまに影響を及ぼしたことは、先行研究によって明ら

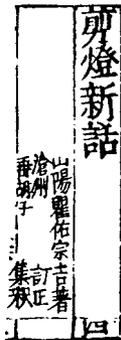
かにされている。

しかし、すでに室町期の一五世紀後半には、『剪燈新話』は禅林に知られるところであった。すなわち、相国寺の禅僧景徐周麟は、『翰林胡蘆集』（文明一四・一四八二年）を残しているが、その巻三の「誑鑑湖夜泛記」は、『剪燈新話』の一篇「鑑湖夜泛記」を讀んで詠った漢詩であることから、『剪燈新話』がそれまでに伝わって

増補 書籍目録 (寛文十年刊)



増補 書籍目録 (寛文十一年刊)



古今 書籍題林 (延宝三年刊)

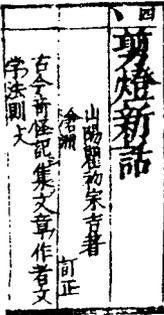


図1 『江戸時代書林出版書籍目録集成』(井上書房、昭和37)より

いたことが知られるのである。^②

また、策彦周良は、大内義隆の遣明使として赴いたが、天文九(一五四〇)年十月十五日に『剪燈新話』と『剪燈余話』を購入した記事が、入明記『策彦和尚初渡集』に見えており、仏教関係書ではなく怪異伝奇の『剪燈新話』を買ったと明記しているところに、該書への関心の高さが窺えるといえよう。

次に、翻訳というレベルで『剪燈新話』がどう享受されたかをみるならば、以下に挙げる事例がある。

まず、『剪燈新話』から一部であるが「金鳳釵記」を翻訳したのは『漢和希夷』(東寺藏)が最初であり、また作者未詳の怪異小説集『奇異雑談集』(全三十九話・近世極初期成立)は、「金鳳釵記」「牡丹燈記」「申陽洞記」の三篇を訳出している。^④

さらに、俳人池田正式の『あやしくさ』(霊怪艸)には、八篇の翻訳が収まっている。慶安年間の執筆とされる該書は、その本文が「和刻整版本『剪燈新話句解』(慶安元年刊)の注文を大幅にとり入れている」という指摘があり、翻訳に用いたのが『剪燈新話句解』であった事実は、大いに注目される。

ここで興味深いのは、儒学者林羅山に『怪談』という編著書、三代將軍家光の儒医でもあった羅山が寛永末年に献上した怪談集があることである。^⑥ また『怪談全書』(全三十二話・刊行は元禄十一年)

という翻訳書もあって、中国の怪異説話から数話を集めて翻訳しているなかに、『剪燈新話』から「金鳳釵記」の一話が漢文訓読片仮名交じり文（抄訳）で収まることから、羅山が、いかに外国の怪異譚に関心が高かったかが知られる。この『怪談全書』は、「近世怪異小説の先駆的名作品」と評価される。

ところで、羅山が手にした本は、後述するように、朝鮮で印行された『剪燈新話句解』であった。

三 朝鮮王朝初期成立の『剪燈新話句解』

前項で見てきたように、日本近世初期の『剪燈新話』の享受において、『剪燈新話句解』が果たした役割の大きいことが明らかとなっている。つまり、『剪燈新話』は、実際には注釈本の『剪燈新話句解』をもって、多く読まれ享受された、ということである。

では、この『剪燈新話句解』はどのような本で、いつどのように成立したのか、見ておこう。^⑧

題目にある「句解」は「語句の解」、つまり単語・句の解釈の意であり、『剪燈新話』本文に登場する語句や表現などについて解説や注釈を施した、いわば注釈書が『剪燈新話句解』である。

しかし単なる注釈書ではなく、さまざまな出典を明らかにし、詩文を引用紹介し、中国古典の幅広い知識も得られる注釈内容となっ

ている。いわば中国百科事典的内容の注釈が、本文と共に読み味わうことができる「句解」であった。

『剪燈新話』は、朝鮮王朝初期に伝わり、大いなる関心をもって歓迎された。本国の中国では禁書となり、およそ四〇巻の『剪燈錄』は散逸し伝わらないようだが、その後永楽一九（一四二二）年（暹佑七十五歳の時）に、重校本の刊行が行われた。刊行後すぐに朝鮮にも伝来し、さらに朝鮮の地で印本も作られて、広く流布するところとなった。壬辰の倭乱（一五九二年）以前の木活字本の伝存が、知られている。^⑨

ところで、朝鮮王朝時代における『剪燈新話』の享受を証明する最も古い記録は、梅月堂・金時習（一四三五～一四九三）の詩「題剪燈新話後」（『梅月堂集』）である。

この詩は、梅月堂が『剪燈新話』を読み『金鰲新話』を著したごとと関わり注目されるが、この『金鰲新話』が日本に渡り、和刻本に仕立てられていた事実もまた、きわめて重要であり、筆者はその報告を行った。^⑩

朝鮮王朝代には、『剪燈新話』が「子不語怪力乱神」の立場から批判を受け排斥された一方で、歓迎もされたのは、志怪小説を味わうに止まらず、本文にさまざまな中国古典作品が登場し、経書・史書の引用が多いこと、また当代中国の口語を理解する上でも、有用

な書として評価されたことによる。胥吏の学習書として、また儒生の初學者向け学問書としても活用された時代の背景と需要が、あった。このような社会文化的背景は、日本の室町後期・江戸期の状況とは異なる点として、留意しておく必要がある。

さて、こうしたなかで、礼部令史である宋蕘^{ソングン}は、明宗二（一五四七）年に垂胡子・林芑^{イムギ}（？～一五九二）に「釈」を依頼した。吏文学官であった林芑は、博学で知られ、中国語に堪能かつ中国文学・群書に広く通じ、特に「吏文」（对中国の官用公文）にも熟達した人物であり、まさに注釈書作製の適任者であった。

こうして明宗四（一五四九）年に、林芑が集釈したものを、宋蕘が木活字で印行した活字本の『剪燈新話句解』が、最初に成立した。板木の準備がかなわなかったため木活字に拠ったという。この木活字本は、「字多刳缺」で印字の見づらいう所があったという。

十年後の明宗十四（一五五九）年に、滄洲・尹春年^{ユンチュンニョン}（一五一四～一五六七）が以前に若干の訂正を加えていたが、林芑は自身の注釈に縮約等の手を入れ（「刪煩就簡」）たものを、この時「正憲大夫刑曹判書兼芸文館提学」の地位にあった尹春年^{ユンチュンニョン}が尹繼延^{ユンケギン}に板刻を勤めて、木板本で板行されることとなった。以上の経緯は、林芑の「剪燈新話句解跋」が示すところである。

このように、『剪燈新話句解』には、木活字と木板によるもの

二種が、存在した^①。

しかし印行はこれに終わるものではなく、嘉靖甲子（一五六四）年にも印出されていることが、尹春年の跋文「題註解剪燈新話後」によって知ることができる。

おそらくそれ以降も何度も摺られ、また新しい板木も作られ印行が続いたと推測される。なぜなら、各種伝本を比べたところ、行数・字数の異なる伝本があることから、板木に数種があったと知られ、また摺り面に、鮮明さや文字・匡郭の欠損上の差異が、認められるからである。

いずれにしても、先行の木活字本は、大量の印出でないこともあってか、散逸してしまったようである。伝本が韓国内においても現在のところ確認できていない。なお今後の調査が必要であるが、あるいは日本に伝存してはいないかと、筆者は考えている。

四 朝鮮刊本の『剪燈新話句解』と林羅山

現在、国立公文書館には、朝鮮刊本の『剪燈新話句解』が一本所蔵されている。目録には、

（林羅山手校手跋本）二卷 明瞿佑撰（朝鮮尹春年）（滄州）訂
正（林芑）（垂胡子）集釋 朝鮮刊 江 二冊 三〇九函 一
三〇号

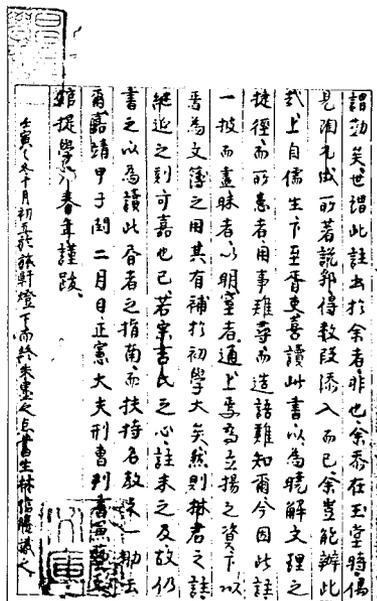


図2 林羅山の手写の一部と識語

と記される。「江」という略号は、林羅山本を意味するもので、伝本の一丁右下に羅山の蔵書印「江雲潤樹」の朱印記があり、羅山が大切に所蔵していた朝鮮本であるとわかる。

また、羅山が開いた私塾でのち江戸幕府最高の教学機関となった「昌平坂学問所」の黒印記が、表紙右上と末丁の左上欄外にあるのは、寛政九（一七九七）年以降所蔵の際捺されたもの。また明治八年から官立図書館浅草文庫としてあったのち、明治一七（一八八四）年に創設の内閣文庫に移管され、その後今日の「国立公文書館」所蔵となっている。

本の装訂として、朝鮮本に典型的な「五つ目綴じ」であることが

目につく。

何よりもこの伝本で最も重要で留意すべきは、本文とは別に付け足された用紙があつて、そこに羅山の手写があることである。一丁と最後の二枚の紙は、本文の紙とはまったく異なる少し厚めの紙で、一丁には目録や序が手写され、末丁には「剪燈新話句解跋」と「題註解剪燈新話後」が手写されている。そしてそのあとに、

壬寅之冬十月初五於旅軒燈下而終朱墨之点書生林信勝識之
という羅山の識語も、墨で手書きされている（図2参照）。

壬寅は、慶長七年（一六〇二）であり、羅山二十歳の時になる。では、この手写は、一体どこでなされたのであろうか。

これまで全く論じられていないが、羅山の年譜、行状を見ると、まさに壬寅年の秋十月に、羅山は長崎に旅していることがわかる。この旅において、羅山は、別の『剪燈新話句解』本を見たとしてよい。識語中の「於旅軒燈下」という表現がそれを表しているからである。壬寅年に（和刻本はまだ無い時期である）、羅山は『剪燈新話句解』を手にすることがあったが、すでに持っている朝鮮本には無い内容を、そこに見たのであろう。そこで羅山は、その部分を写し取るというを行ったようである¹³。

そして京に戻り、私蔵の本に、手写したものを加えたのではないかと考えられる。

実見したところ、右の羅山識語の一行だけが、他より墨色が濃く、しかも若干小さめの文字であった。これはあとから墨書きしたことを示すものと見てよい。すなわち、手写を京に持ち帰り、私蔵の『剪燈新話句解』本に改めて識語を墨書きしたものと判じられるのである。(図2参照)

このことを証するのが、次にあげる羅山の「牡丹燈詩并序」(『林羅山詩集』卷第二十二)、

(前略) 剪燈新話。其中有曰牡丹燈記者。庚子歲豫讀此記(中略) 予始不藏此本。辛丑春見于書肆而即贖之歸宅。其後句読焉。朱墨点焉握翫吟咏焉者久也矣。

である。そこには、庚子年(慶長五年・一六〇〇、羅山十八歳)に『剪燈新話』の「牡丹燈記」を読んだこと、この本を蔵していなかったので、辛丑年(慶長六年・一六〇一)の春に書肆で見かけて即購入した、と記している。そしてその後、句読と朱墨を点じたと記しているが、壬寅年(一六〇二)の長崎行きがこの間にあったのであり、辻褄があう。

羅山が購入していた本は、朝鮮本の『剪燈新話句解』であった。国立公文書館蔵の「羅山手校手跋本」が、まさにそれである。

林羅山は、近世初期において最も多くの朝鮮本に接することができた稀有な人物であり、慶長九年二十二歳の時それまでに読破した

本、四百四十余部の書目を作っているが、そのなかに「剪燈新話」の書名が見えている。しかし「句解」の字はない。けれども実際には『剪燈新話句解』の本であったわけである。¹⁵⁾

ただ、この内閣文庫蔵の朝鮮本をもとにして、のち和刻本が作られたかどうかについては、野口一雄氏は、『剪燈新話句解』諸本の対比検証を行った結果から、それを否定的とされている。¹⁶⁾

五 日本に現存する朝鮮刊本『剪燈新話句解』

日本近世初期は、印刷技術の飛躍的な発展によって出版文化が花開いた時期といえるが、そこに朝鮮王朝時代の印刷技術が大きく貢献したことは、周知のことである。豊臣秀吉の朝鮮侵攻によって多くの印刷機具と活字が日本に持ち帰られ、同時におびただしい量の朝鮮本と唐本が奪われ日本に運ばれてきた。¹⁷⁾

その結果、さまざまな典籍・書籍が「和刻本」に作製されることとなった。『剪燈新話句解』もその一例である。

日本における『剪燈新話』享受において大きい役割を果たした『剪燈新話句解』本のうち、現在日本で所蔵が確認できた朝鮮刊本について、これまでの調査結果を目録に記載のまま次に紹介する。(書名は省略。なお二〇世紀初の翰南書林刊本は除いた。)

1. 朝鮮刊本『剪燈新話句解』

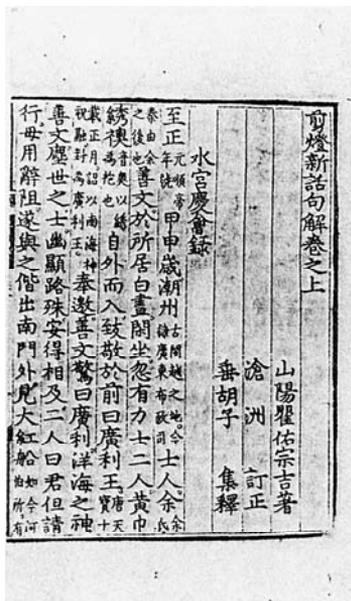


図3 名古屋市蓬左文庫蔵本

宮内庁書陵部蔵本¹⁸⁾

二卷 明 瞿佑 垂胡子集釋 朝鮮版(秘) 二冊 四〇三函

一二九架

国立公文書館蔵本(本文に既出)

名古屋市蓬左文庫蔵本(図3)

二卷 二冊 明・瞿佑撰 朝鮮・垂胡子集釋 朝鮮旧刊 黒口

十一行本 有御本印記 駿河御讓本

東洋文庫蔵本²⁰⁾

二卷 明瞿佑撰 朝鮮尹春年訂正 朝鮮林芭集釋 朝鮮刊本

一冊 VII—4—225

筑波大学附属図書館蔵本(旧・東京教育大学蔵)²¹⁾

二卷 二冊 瞿佑(明)著 尹春年(朝鮮)訂正 林芭(朝鮮)集釋(朝鮮李朝期)刊 木板本 ル三八〇—一三八

国立国会図書館蔵本²²⁾

2卷 明 瞿佑著 尹春年訂正 林芭(垂胡子)集釈(朝鮮)

一三三丁 30 cm 和 鶯4026

東京大学総合図書館蔵本²³⁾

二卷 明瞿佑撰 朝鮮尹春年訂 朝鮮林芭集釋 朝鮮癸亥「哲

宗十四年」武橋刊本 有識語 E46—21 二 青

東京大学東洋文化研究所蔵本

二卷二冊

早稲田大学図書館蔵本²⁴⁾

(1)二卷/明・瞿佑著 李朝・尹春年訂 李朝・林芭集釋 二冊

韓大 へ二—二七八三

(2)二卷/明・瞿佑撰 明・垂胡子集釋 萬曆四二年五月/一冊

(合冊) 韓大 特へ二—二七八四

京都大学附属図書館蔵本²⁵⁾

垂胡子 集解 刊 韓大 二卷(朝鮮古版) 虫入

天理大学附属天理図書館蔵本²⁶⁾

(1)二卷二冊 瞿佑(明)著 尹春年(滄洲)訂正 林芭(垂胡

子)(朝鮮)集釋 朝鮮袋綴 改装後補砥粉色表紙 二八種

一九・五種 四周単邊二三種一七種 有界十一行二十字小双

行 外題左肩墨「剪燈新話 上(下)」柱刻白口「上(下)

(丁教)、「積翠軒文庫」(朝鮮版 内題の次に「山陽瞿佑宗吉

著／滄洲 訂正／垂胡子 集釋」とあり 九三三―イ四五)

(2)二卷二冊 瞿佑(明)著 尹春年(滄洲)訂正 林芑(垂胡

子)(朝鮮)集釋 朝鮮袋綴 金茶色毘沙門格子摺出表紙

二八種一九・五種 四周単邊二三種一六種 有界十一行二十

字小双行 題後補墨左肩「剪燈新話 上」(下冊欠)柱刻白

口「剪燈上(下)(丁教) 識語(朱書) 大正 丑穀雨節 青

山観(朝鮮版 内題の次に「山陽瞿佑宗吉著／滄洲 訂立／

垂胡子 集釋」とあり 九三三―イ七三)

大阪府立図書館蔵本²⁷⁾

板本 上下二冊 明 瞿佑著 垂胡子集釋 韓九 八三

尊経閣文庫蔵本²⁸⁾

二卷 明垂胡子 朝鮮版 四(冊)

宗家文庫蔵本(対馬)²⁹⁾

二卷 二冊(明) 瞿佑撰 (朝鮮) 尹春年校、李吉集釈

岩瀬文庫蔵本³⁰⁾

剪燈新話 韓版 二冊

慶応義塾図書館蔵本

二卷二冊

関西大学図書館蔵本

二卷一冊

六 江戸初期の和刻本『剪燈新話句解』

江戸期に日本の地で再製作した版本(特に漢籍)は「和刻本」と呼びならわされている。

『剪燈新話句解』の場合、和刻本は、板行された時期と印刷方法などによって、二種に分けられる。慶長元和年間刊の古活字版本と呼ばれるものと、慶安元年の刊記をもつ整版本である。

古活字版本は、慶長から元和・寛永期の、比較的短い約五十年の期間に印出された本である。活字で印出されており、字形が大きく、八行一六字に組まれた大本である。慶安刊記本に比べると格段に文字が大きいことがわかる。図版4は、川瀬一馬氏紹介(『増補古活字版本の研究 下巻』)の旧高木文庫本である。古活字版本は稀本といえ、現在のところ後掲の四伝本が確認できている。

慶安元年刊記本の方は、整版本(木板本)である。付訓本であり、四冊本である。刊記はすべて「慶安元年」であるが、板元は、田原仁左衛門、井筒屋六兵衛、林正五郎の三種が見受けられる。すべて京の板元である。長澤規矩也氏『和刻本漢籍分類目録』(汲古書院、

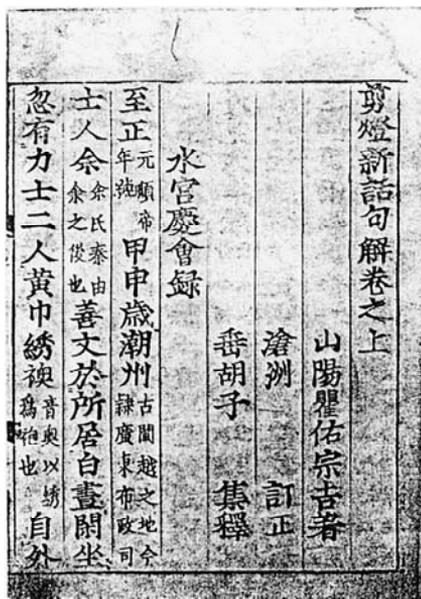


図4 (旧) 高木文庫蔵本

昭51)は、井筒屋六兵衛と林正五郎版を「後印」とする。田原仁左衛門板が初版で、のち井筒屋六兵衛、林正五郎へと版元が移り、刊記はそのままで摺られ続け、広く流布したのが整版本である。

前項で見てきた朝鮮刊本と、江戸初期に刊行された二種の和刻本とを比べるなら、二巻二冊ものは朝鮮刊本であり、そして三冊本は、日本の古活字版本であり、四冊本であるのが慶安元年刊記の整版本、というのが筆者の考えである。

国立公文書館所蔵にかかる慶安刊記本は二本あり、一つは仁左衛門、今一つは林正五郎の板元。ところが実見したところ、両者に決

定的な相違点は、前者が「五つ目綴じ」であるのに対し、後者は「四つ目綴じ」である。また後者の方が若干小さい。すなわちこれは、林正五郎版の頃には、装訂方法が日本の様式に変化し定着したことを意味しよう。朝鮮本の特質である「五つ目綴じ」という外來の様式が和様化していったと言えよう。

1 古活字版本

国立公文書館蔵本(旧・内閣文庫蔵)

明瞿佑撰 朝鮮尹春年訂正 林芑集釋「慶長・元和間」刊(古活)林 三冊 三〇九函一三一号

大妻女子大学図書館蔵本²²⁾

慶長年中刊 上中下三冊 古活字版「洪武十一年歲次戊午六

月朔日山陽瞿佑書于吳山大隱堂」等の三序あり。無刊記本(跋

文なし)

お茶の水図書館蔵本(旧・成篋堂文庫)²³⁾

明瞿佑撰・滄洲訂正・垂胡子集釋 四卷(付) 一卷 三冊

島原図書館蔵本(旧・肥前島原松平文庫蔵)²⁴⁾

慶元中刊 三冊 単辺有界 八行十六字

2 慶安元年刊記本(※巻冊数と板元等に限定し記載する)²⁵⁾

国立公文書館藏本

(1) 四卷 四冊 二條鶴屋町書林仁左衛門刊行

(2) 四卷 四冊 林正五郎刊行

東洋文庫藏本

(1) 四卷附録一卷 四冊 京都仁左衛門據朝鮮刊本重刊

(2) 四卷附録一卷 四冊 京都仁左衛門據朝鮮刊本重刊

静嘉堂文庫藏本

四卷 四冊

国立国会図書館藏本

四卷〔京〕(書林) 仁左衛門 四冊 二八cm

京都大学文学部図書室藏本

(1) 四卷四冊〔京〕 井筒屋六兵衛

(2) 四卷四冊 京林正五郎

(3) 四卷一冊〔京〕 書林仁左衛門

(4) 四卷四冊〔京〕 田原仁左衛門

京都大学人文科学研究所藏本

四卷四冊 京林正五郎

東京大学東洋文化研究所藏本

(1) 四卷 京都鶴屋町書林仁左衛門刊本

(2) 四卷四冊 京都 仁左衛門

(3) 四卷四冊 京都仁左衛門刊京都井筒屋六兵衛重印本

東京大学総合図書館藏本

四卷 京都仁左衛門刊本

早稲田大学図書館藏本

(1) 四卷 四冊 京都 林正五郎

(2) 四卷 四冊 田原仁左衛門

(3) 四卷附秋香亭記 二冊 林正五郎

(4) 四卷附秋香亭記 二冊 井筒屋六兵衛

(5) 卷一・二〔江戸刊〕 二冊

大阪女子大学付属図書館藏本

大二 刊 二条鶴屋町書林仁左衛門刊行

尊経閣文庫藏本

四卷

東京都立中央図書館藏本(加賀文庫)

4卷 4冊 林仁左衛門 大

広島大学図書館藏本

四卷 仁左衛門刊京都林正五郎重印本

岩瀬文庫藏本

四卷 和

温泉寺藏本

四冊 京 井筒屋六兵衛

国文学研究資料館蔵本

(1) 四卷一冊 井筒屋六兵衛〈京〉 外題「剪燈新話句解」

(2) 四卷二冊 書林仁左衛門〈京〉

東北大学附属図書館蔵本

(1) 四卷四冊 京都田原仁左衛門

(2) 四卷四冊 京都田原仁左衛門

一橋大学附属図書館蔵本

(1) 四卷四冊 京都書林仁左衛門

(2) 四卷四冊 京都林正五郎

九州大学附属図書館蔵本・四卷四冊 京都 仁左衛門

愛媛大学附属図書館蔵本・四卷二冊 京都書林仁左衛門刊本

愛知大学図書館蔵本・四卷四冊 重刊本

中央大学図書館蔵本・四卷四冊 京都仁左衛門刻林正五郎重印本

関西大学図書館蔵本

(1) 四卷 仁左衛門 (2) 〔京都〕林正五郎 (3) 四卷一冊 井筒屋

六兵衛 (4) 四卷四冊 〔京〕井筒屋六兵衛(後印) (5) 四卷一冊

〔京〕〔田原〕仁左衛門(林正五郎版行) (6) 四卷四冊 河南四

郎右衛門

新潟県立新潟図書館蔵本・四卷一冊 京都書林仁左衛門刊本

立命館大学蔵本・四卷四冊 後印 京 林正五郎

実践女子大学蔵本・四冊 京都仁左衛門刻本

茨城大学蔵本・二冊 京 仁左衛門

慶應義塾図書館蔵本・四冊

山梨県図書館蔵本・四冊 京・仁左衛門

飯田市立中央図書館蔵本・一冊 京都鶴屋町書林仁左衛門刻本

佐野市立郷土博物館・四卷

三康図書館蔵本・四卷四冊 京 井筒屋六兵衛 後印

刈谷市立刈谷図書館蔵本・一冊 鶴屋仁左衛門 〈京〉

注

① 拙稿「紀州藩石橋家『家乗』と朝鮮文学『金鰲新話』——『剪燈新話』伽婢子の侍説・侍講と関連し——」本誌・第七六号、二〇二二、三。

② 澤田瑞穂「剪燈新話の舶載年代」『中国文学月報』三五号、一九三八。

③ 市古夏生「作者未詳『奇異雑談集』」『国文学解釈と教材の研究』一九九二、八月号、七六頁。ただ、「金鰲新話」の翻訳部分は欠損が多く全体は詳細にはわからないとされる。

④ 注③、七四～七五頁。

⑤ 坂卷甲太『浅井了意怪異小説の研究』新典社、平成二年、三四二頁。

⑥ 富士昭雄「林羅山『怪談全書』」注③の雑誌、六七頁。

⑦ 注⑥、六七頁。

⑧ 柳鐸一『韓国文献学研究』(ソウル・亜細亜文化社、一九八九)、チョン・ヨンス『剪燈新話句解』訳注(プルン思想、二〇〇三)、崔溶徹

『剪燈新話』(学古房、二〇〇九)、申相弼「異本を通してみた『剪燈新話句解』の伝播様相とその意味」『古小説研究』(第二九輯、二〇一〇、六)などの研究がある。

⑨ 朴現圭「忠南大所蔵朝鮮壬辰乱以前木活字本『剪燈新話』」『中国小説研究会報』第39号、一九九九、九。

⑩ 拙稿の「朝鮮刊本『金鰲新話』と林羅山」『朝鮮文学論叢』白帝社、二〇二二。「資料紹介」和刻本『金鰲新話』の諸本」本誌第64号、二〇〇六、一二。「梅月堂『金鰲新話』の和刻本——板本の特質と成立時期——」本誌第70号、二〇〇九、三。「資料紹介」和刻本『金鰲新話』の諸本(統)」本誌第72号、二〇一〇、三。などを参照されたい。

⑪ この経緯に関しては拙稿「新資料紹介」朝鮮刊本『金鰲新話』発掘報告の紹介と成立年代」(『朝鮮学報』第一七四輯、二〇〇〇、一)一四四―一五〇頁を参照されたい。

⑫ 『改訂内閣文庫漢籍分類目録』昭和四六年。筆者は二〇〇二年一月一日に調査。

⑬ 秋吉久紀夫氏は「序跋が欠けていた『剪燈新話句解』本に、序跋が備わっていた『剪燈新話句解』本から写し取った文であった。」とされる。(『瞿佑と桂衡』『香椎湯』二七号、昭和五七年、三、二二―四頁)

⑭ 鈴木健一「林羅山年譜稿」べりかん社、一九九九を参照。

⑮ 阿部吉雄「日本朱子学と朝鮮」東京大学出版会、一九六五、一六六頁。

⑯ 野口一雄「剪燈新話句解の諸本」『伊藤漱平論文集』

⑰ 藤本幸夫「印刷文化の比較史」『アジアのなかの日本史Ⅵ』東京大学出版会、一九九三。「国立国会図書館所蔵古活字版図録」汲古書院、平成一年、四〇三頁。

⑱ 『和漢図書分類目録』上巻、宮内庁書陵部、昭和二十七年。(秘)は秘閣本のこと。筆者未見で二五四九年版木活字本か否か未確認。

『剪燈新話句解』考

⑲ 『名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録』昭五〇。「御本」は尾張藩初代藩主徳川義直の蔵書印をいう。「蓬左文庫展観目録」(昭32)も参照。

⑳ 『東洋文庫所蔵漢籍分類目録』子部、昭和五三年。

㉑ 『筑波大学和漢貴重図書目録』筑波大学附蔵図書館、平成八年。藤本幸夫「東京教育大学蔵朝鮮本について」(『朝鮮学報』第81輯)参照。

㉒ 『国立国会図書館所蔵朝鮮関係資料目録』4、朝鮮本篇。昭和五〇年。

㉓ 『東京大学総合図書館漢籍目録』一九九五。

㉔ 『早稲田大学図書館所蔵漢籍分類目録』平成三年。

㉕ 『京都大学文学部漢籍分類目録』第1、昭和三四四年(邊注・目録には「朝鮮古版」とあるが、調査結果「滄洲訂正」本である。十一行二十字。柱「上」とあった。)

㉖ 『天理図書館稀書目録和漢書部』第三、昭和三五年。

㉗ 『大阪府立図書館蔵 韓本目録』昭和四三年。

㉘ 『尊経閣文庫漢籍分類目録』昭和九年。

㉙ 藤本幸夫「宗家文庫蔵朝鮮本に就いて」『朝鮮学報』99・百輯、昭和五六年。なお「李芭」とあるのは「林芭」の誤である。

㉚ 『岩瀬文庫図書目録』昭和十二年。目録には「剪燈新話」と挙がる。

㉛ この呼称について「正確には慶長元和活字本(二五九六―一六二四)と呼称し、この底本は、嘉靖三八年(一五五九)に朝鮮の林芭の注釈した『剪燈新話句解』本であった。」とする。(注⑬に同)

㉜ 江本裕「解説」『伽婢子2』平凡社・東洋文庫、一九八八、一八〇頁。

㉝ 『お茶の水図書館蔵新修成篋堂文庫善本書目』お茶の水女子大学図書館、一九九二。

㉞ 中村幸彦・今井源衛・島津忠夫「『文学』昭和三十七年一月、八八頁。

㉟ 各所蔵所発行の漢籍目録、及び「日本古典籍総合目録データベース」『全国漢籍データベース』によって調査。